
呪われたリンゴ

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われたリング

【Nコード】

N3556E

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

夏の甲子園大会決勝九回ウラ二死満塁。三点のリードがひっくりかえるこの大ピンチに、守る青森王林高校のエース千秋は三年間温めてきた秘球を使おうと決心する。だがそれは確実に肩を壊す危険な球だった。それに対して捕手の椎名が言った言葉は。千秋は秘球を使うのか。

さあ今大会もいよいよ大詰め、青森王林高校と島根幸水学園、どちらが勝っても県勢初優勝です。試合は九回ウラ二死満塁、王林高校の三点リードで迎えております。島根幸水学園、これが最後のチャンスとなるでしょう。迎えるバッターは四番、主砲の雲井。別名山陰の快男児です。あつとここでタイムです。王林高校タイムをとりました。

日本全国のテレビ、ラジオから興奮したアナウンサーの声が響いている。この国の夏の風物詩、いわずと知れた夏の甲子園大会決勝である。ほぼ本州全土を挟んで相對峙した二校は、ともに初の優勝旗を故郷に持ち帰るために、激しい死闘を繰り広げていた。あと一人討ち取れば王林高校の勝利である。しかし相手はこの日四打席三安打、今大会における本塁打数はすでに六を記録している怪物であった。マウンドに駆け寄った捕手の椎名が、連投に消耗激しい投手を氣遣つて声をかける。

「千秋、あと一人討ち取ればこの試合は終わりだ。落ちついていけ。今んとこ俺たちに有利だから、いつも通りやれば絶対に勝てる」

椎名がいうと、投手の千秋がニヤリと笑う。

「椎名、俺はあの球を使う。この日のために練習してきたあのなぜかフライになる球、を」

「なんだって？」椎名の顔が怪訝そうに歪んだ。「お前、あれをこんな状態で投げたら、一発で肩をやられちまうぞ」

千秋は溜息をついた。

「俺は雲井と違ってプロにはいけん。神宮だつて怪しいんだ。ここが最初で最後の大舞台なんだよ。わかってくれ。俺は使いたい。あれさえあれば、確実に雲井を打ち取れるんだ」

灼きつける日差しにばたばたと汗を滴らせる千秋の顔には、有無

を言わせぬ迫力があつた。目を見交わす二人の頭が、沸騰する思考と暑気にぼうつとしはじめ。椎名が小さく頷いて、おずおずと口を開いた。その声はいつもの陽気な彼とは違う、ざらついた低い響きをもっていた。

「駄目だ。俺たちにはまだ香里園大会がある」
こうりえん

「こうり……なんだって？」驚きながら、千秋が訊いた。

「香里園だ。俺は兵庫からの野球留学だよな。この土地には甲子園のほかには香里園があつて、高校生では甲子園優勝チームだけが出場できる裏の大会が行われているんだよ」

「裏の……大会。ラスボス倒したら入れるダンジョンみたいなものか」

「酷い例えだけど、要するにそうだ。そこに来るのは神宮大会優勝の大学生チーム、セ・パ優勝のプロチーム、都市対抗の優勝チームあとなんだつけ、アメリカのチームも来た気がする」

「マジか。そんな大会があるなんて全然知らなかったぞ」

「無理もないよ。地元民でも知ってる人は少ない。しかしあれに出られるのは名誉なんだ。だからお前も肩を労ってくれ。ここで壊したら面白くないぞ」

千秋は頷いた。まだ俺にもやることがあるということか。血の滲む練習で会得したあの秘球、香里園大会まで取っておいてやるぜ。

「どうした？ 大丈夫か？」投手の顔を覗き込んだ椎名の声は、いつもの陽気な調子に戻っていた。千秋は目でそれに答えた。

試合が再開された。バッターボックスに立つ雲井の体は、高校生とは思えない巨漢である。だが相手も同じ十八、こちらだって決勝投手だ。いざ戦わん、この血潮にかけて。

大きく振りかぶった千秋の手から、全身全霊の力を込めた白球が放たれた。そしてそれは彼の指をすっぱ抜けて、山なりのカーブを描きながら打者に向かった。千秋、椎名、守備、観客、解説者、アナウンサー、視聴者の全てが「あっ」と思った。ボールが雲井の面

前にいい按配で落ちかかると、渾身の力で振られたバットが球場に響きわたる快音を奏でた。少年たちの夢は、鋭い直線を曳きながら浜風吹く大空に呑み込まれていった。

ホームラン、雲井の満塁ホームラン。幸水学園逆転、逆転です。王林高校勝利ならず。優勝の大旗は島根県に、山陰初の島根県にもたらされました！

興奮して叫ぶアナウンサーの声が、球場の喧噪をバックに日本の津津浦々に響き渡る。腕を振りかざしてダイヤモンドを回る打者と走者、そしてマウンドに崩れ落ちた投手の姿が、順番にテレビに映し出された。けたたましいサイレンの音が鳴り響く。夏の終わりだ。そしてそれまで口数の少なかった解説者が、ひと言だけ静かに呟いた。

「王林高校、甲子園の魔物にやられましたね」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3556e/>

呪われたリンゴ

2010年12月30日14時29分発行